

漢語サ変動詞の ボイスに関する一考察

— 自他交替型と無交替型に分ける試み

金子由美子

◆要旨

本稿では、漢語語幹を、「-する」・「-させる」で自・他の対になるものを「(自他) 交替型」、能動・使役の対になるものを「無交替型」とする2グループに分けることを提案する。また、永澤(2007)の漢語80語を用いて、日中韓の漢語動詞のボイスを対照させることにより、このグループ分けが通言語的にも有効であることを示すと同時に、「交替型」に学習者の誤用が集中する実態の背景を可視化する。さらに、近代で「-する」接続時に自他両用だった漢語のうち現代で自動詞専用化だけが進んだ理由が、日本語における他動化接辞「-させる」の存在と自動化接辞の欠如であるという永澤(2007)の主張が、日本語学習者(中国語・韓国語母語話者)の誤用を説明する上でも重要であることを示す。

◆キーワード

漢語サ変動詞、自他交替、自動化接辞、他動化接辞、日中韓対照

◆ABSTRACT

I contend that the stems of Sino-Japanese verbs should be divided into two groups, namely the “transitivity alternation” group and the “non-alternation” group. The verb suffixes *-suru/-saseru* create the set of intransitive/transitive verbs for the “transitivity alternation” group and the set of active/causative verbs for the “non-alternation” group respectively. Comparisons of voice in 80 Sino-Japanese verbs in Nagasawa (2007) with Korean and Chinese show that this grouping is valid both language-internally and cross-linguistically. The comparisons also illustrate why the learners make more suffix errors in the “transitivity alternation group” than in the “non-alternation group.” The results also suggest that Nagasawa’s (ibid.) claim (i.e., the existence of a causative suffix and the lack of an anti-causative suffix in the Sino-Japanese voice system may have contributed to the voice shift of some of the verbs from dual intransitive/transitive usage to intransitive usage alone in modern Japanese) can provide explanation for the common errors made by learners of Japanese whose native language is Chinese or Korean.

◆KEY WORDS

Sino-Japanese verbs, transitivity alternation, anti-causative suffix, causative suffix, Japanese/Chinese/Korean comparative studies

A Study of Voices of Sino-Japanese Verbs The “transitivity alternation” group and the “non-alternation” group

YUMIKO KANAYA

1 はじめに

漢語サ変動詞（以下漢語動詞と呼ぶ）のボイスに関しては、同じ日本語のボイスの問題でありながら和語とは分けて論じられることが多かった。その背景には、漢語動詞には自他を区別する接辞がないとする前提があったと思われる。しかし、漢語動詞を和語の語形成と同様に、語幹と接辞からなると捉えなおし、和語とすり合わせてみると、漢語動詞も、和語の「有対動詞」のように、同じ語幹が自動詞にも他動詞にも使われる「自他交替型」（以下「交替型」とする）と「無対動詞」にあたる「無交替型」に分けることができる。

(1) 和語と漢語の比較^[註1]

- 交替型**
- ・「yabur-u (破る)」自ラ下二／他ラ四 (古典語)
⇒「yabur-er-u」自ラ下一／「yabur-u」他ラ五 (現代)
 - ・「破裂-する」自他両用 (近代)
⇒「破裂-する」自動詞専用化 (現代)／「破裂-させる」他動詞 (現代)
- 無交替型**
- ・「作る」他ラ四⇒他ラ五：「作成-する」他動詞 (近代・現代)
 - ・「歩く」自カ四⇒自カ五：「歩行-する」自動詞 (近代・現代)

無交替型では、和語も漢語もボイスに通時的な変化が見られないのに対して、交替型では自他の分化が見られる。本稿は、漢語動詞においても自他の分化が起きつつあることを指摘した永澤 (2007) にヒントを得て、漢語語幹を交替型と無交替型に分ける試みである。また、この分類の教育的意義についても触れる。

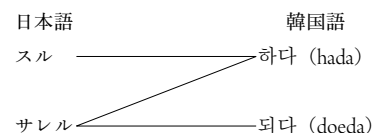
まず、2節で学習者の漢語接辞の誤用の問題に触れ、3節で漢語語幹を交替型と無交替型の二つに分ける意義を論じらう。4節では永澤 (2007) の漢語動詞80語について日中韓のボイスを対照させることにより、このグループ分けに通言語的な根拠と教育上の意義があることを可視化する。

2 先行研究

漢字文化圏の学習者の漢語接辞の誤用はこれまで長きにわたって研究者の注目を集めてきた (生越1982; 柴1986; 田窪1987; 辛1993; 許2004; 庵2010, 2013; 庵・高・李・森2012; 張2014; 尹2015; 高2017等)。韓国語母語話者 (以下KN) の場合、次のような接辞「-される」の誤用が特に目立つことが指摘されている。

(2) *戦後日本はととも発展された。(⇒した) (田窪1987)

「拘束される=拘束되다 (doeda)」のような日韓の接辞の対応の過剰般化の結果として、(2) のような誤用が度々産出されると考えられる。このような日韓の漢語接辞のずれは、図Aのような対応があるためであることを、生越 (1982) が指摘している (韓国語アルファベット表記は韓国文化観光部2000年式による)。



図A 日韓ボイス接辞の対応 (生越1982)

柴 (1986) は、①日本語教育における「される=되다 (doeda)」という安易な指導法、②韓国語の漢語自動詞の接辞には「하다 (hada)」・「되다 (doeda)」の二種類があることに加え、③韓国語には日本語のような受身形式が存在しないことを誤用の理由として挙げており、実際の対応は図Aより複雑である。

一方、中国語母語話者 (以下CN) の場合は、次のような誤用の方が目立つ。

(3) (奨学金をもらったら)*バイトを減少して勉強に専念します。(実例)

(3) は、漢語ではなく和語「減らす」を使うべきであるということを除いて

も、現代日本語では自動詞に傾いている「減少する」を他動詞として使用している点に問題がある。CNにも(2)のような誤用は見られるが、庵(2013)でも指摘されているように、(3)の例(減少する)のような自動詞に傾いている漢語動詞を他動詞と捉えることの裏返しとして「受身文」にしてしまうためであると思われ、先に見たKNの誤用とは原因が異なると考えられる。

庵(2010, 2013)、庵・高・李・森(2012)は、これらの現象を指して非対格自動詞に「-される」を接続する間違いが多いと指摘している。このように影山(1993)以降、小林(2004)のように、漢語動詞を論じる際に非対格仮説を用いた論述が増えたが、非対格性の認定が不透明な場合も多く、関心が自動詞に偏る傾向があった。また、先行研究では、辞書の記述と同様に、漢語動詞を「-する」接続時のボイスで「自動詞専用・他動詞専用・自他両用」の三種類に分けるという前提があったが、本稿では、漢語語幹を「交替／無交替」に分けることが漢語動詞のボイスの全体像を理解する上で有効であることを提案する。

3 提案：「(自他) 交替型」と「無交替型」に分ける

本稿では、漢語動詞のうち、接辞が「-する・-させる」で「自・他」の対になるものを「交替型」、「能動・使役」の対になるものを「無交替型」とする。「交替型」では、同じ語幹が、接辞によって自動詞にも他動詞にもなり得るのに対して、「無交替型」ではそうではない。これについて漢語動詞のパラダイム(表1)を用いて示す。なお、目的語としてヲ格をとるものを他動詞とし、「-させる」のうち、使役主の項も被使役者の項も有情物であるものを使役文とする。

教育的な観点から見たとき、自動詞専用化したもの(発達)と自他両用のもの(停止)を交替型としてひとくりにすることは、一見ややこしく見えるかもしれないが、メリットもある。無交替型は、「-する」で他動詞の語幹(殺害)も自動詞の語幹(帰国)も共に、「-される」がつくと受身文、「-させる」では使役文となる。これに対して、交替型(発達・停止)では、「-される」の場合、自他両用の「停止する」を他動詞として捉える格体制の場合以外は、直接受身は勿論のこと、非情物が動作主であるため間接受身文としても適格性に欠ける。交替型において「-される」が用いられにくいという知識は、(2)のよう

表1 漢語接辞とボイス

		-する	-させる(使役)	-させる(他動)	(直接受身)	(間接受身)
無交替	殺害	AがBを殺害した(他)	CがAにBを殺害させた		BがAに殺害された	CはAにBを殺害された
自他交替型	停止	工員が機械を停止した(他) 機械が停止した(自)	工場長が工員に機械を停止させた	工員が機械を停止させた	機械が(工員によって)停止された	工場長は工員に機械を停止された
	発達	雨雲が発達した(自)		梅雨前線が雨雲を発達させた		
無交替	帰国	秘書が帰国した(自)	社長は秘書を帰国させた			社長は秘書に帰国された

な誤用の防止に有効である。「-させる」も、交替型では他動詞の代用をするに留まる点で無交替型と区別される。「停止させる」は有情物が被使役者の場合には使役文としての使用も可能ではあるが、森(2012)で報告されているように「-させる」の使役文としての使用頻度がそもそも低いことを考慮に入れると、庵・宮部(2013)が主張しているように漢語接辞「-させる」は第一義的に他動化接辞と捉えられるべきである。

また、交替型では、他動詞の接辞として「-する／-させる」のどちらを使用するかについてゆれが見られるのに対して、無交替型ではゆれが見られないことも学習者にとって重要な情報となり得る。交替型のうち、「-する」で自動詞に傾いているものを中心に日本語母語話者(以下JNとする)は「-させる」を他動詞の接辞として選択する傾向がある^[RE2]が、学習者は必ずしもそうではない。

- (4) a. 牛乳から脂肪分を分離 {します／させます}。 (自他両用：交替型)
 b. 牛乳から脂肪分を除去 {します／*させます}。 (他動詞：無交替型)

CNでは(4a)での「-させる」の非用が目立つ^[RE3]。それに対して、母語に平行する他動化接辞「-시키다 (sikida)」が存在するKNは比較的問題なく「-させる」を使用することができる。(4a)の「-させる」は、定延(1991)の言う「使

役余剰」^[註4]の例と捉えることができるが、「-させる」が他動化接辞として機能するためには、語幹の表す事象において、変化主体に多少なりとも自律性が必要である。変化主体である「脂肪分」に着目したとき、(4a)の「分離」では、変化主体の自律性が感じられるのに対して、(4b)の「除去」では感じられない。「除去」のように、外部からの一方的なはたらきかけにより変化が引き起こされる意味を持つ動詞語幹の場合は、「-させる」を他動化接辞として使用することはできないのである。これは、定延(1991)が、事態の成立において「使役主の働きかけの間接性がSASEの生起を動機づけ、また直接性がSASEの不生起の一因となる」と述べていることに同意するものである^[註5]。

意味特徴においても、統語的なふるまいにおいても、交替型／無交替型は、それぞれ、早津(1987, 1989)で記述されている和語の有対動詞／無対動詞と平行する。交替型は対象の変化の結果を含む表現が多いが、無交替型の他動詞は働きかけの過程の様態に着目するものが多い。無交替型の自動詞は、人の動作・表情・感情、自然現象、静的な状態を表す。また、早津(1987)は、和語の有対自動詞が、変化主体に主体性や意志を求める意向形・勧誘形・命令形では不自然になることが多いことを指摘しているが、漢語の交替型に関しても同様のことが言える(例：*雨雲に「発達しろ」、*機械に「停止しよう」)。自動詞に「-させる」を付加した場合に、交替型では使役文にならない点も平行する。

4 日中韓漢語動詞のボイスの対照

日・韓では接辞による有対の自他の語形成があるグループが概ね交替型に当たるのに対し、英・中では基本的に ϕ 交替で自他両用のものが交替型に当たる。Haspelmath(1993)は、実際にどのような意味の動詞を交替ペアにするかは多少言語によってずれがあるとしても、このような自他の交替(inchoative/causative verb alternation)が起こるグループと、交替が起こらないグループが、通言語的に見たとき意味的に規定されている可能性があることを示唆している。前者は非情物の変化や動きを表し、変化主体に多少なりとも自律性(spontaneity)がある場合を含むものであるという。それに対して、同じモノの変化でも、モノ側にまったく自律性が感じられない動詞の場合は後者に属することになる。言い換

えると、交替型は外的要因とモノの内的自発性とのせめぎ合いの中で事態が成立するという特徴を持つ。交替型において学習者の誤用が多い理由は、接辞の有無などの語形成上の違いだけでなく、交替型の動詞の表す事象においてどういった統語的形式を選択するのかが言語によって異なるためであると考えられる。池上(1981)以降、「する」と「なる」の違いとして捉えられてきた現象も、基本的には交替型における事象の表し方の違いであると言える。翻って、漢語語幹の表す事象がほぼ同じであれば、交替／無交替の区別も日中韓でほぼ共通するはずであり、同じ語幹に関して、3言語のボイスの対応を対照させれば、学習者の誤用の原因を探ることができると考えた。

4.1 調査対象：永澤(2007)の80語(表2)

永澤(2007)は、近代(1868年～1945年)には現代(1945年以降)よりも自他両用の漢語動詞が多かったことに着目し、近代から現代への漢語動詞の「-する」接続時の自他の変遷を調査した。その結果、近代で自動詞専用(I)は現代でも自動詞専用のまま、他動詞専用(III)は他動詞専用のものであるのに対し、近代で自他両用(II)だったもののうち、人為的な事象を表す動詞へと意味が狭まったもの(隔離・短縮・変更)が他動詞専用化したことを除けば、自動詞専用化するという流れがあることが明らかになった。この変化は、永澤(2007)によれば、漢語動詞が日本語への定着度を増すなかで、和語に倣い自他を分化させる方向へ力が働いたため起きた現象であり、それを可能にしたのが、他動化接辞として機能する「-させる」の存在だとみられる。「-させる」が他動化接辞としてもはたらく一方、受動の接辞「-される」はあくまでも受身の接辞であり自動化接辞ではない(停止される \neq 止められる \neq 止まる)。そのため、「-する」接続で他動詞専用化してしまうと、同一語幹を自動詞として使用するための接辞がなくなるという不都合が生じる。結果として、自他両用(II)では、近代から現代にかけて、自動詞専用化だけが起きたと推測されるのである。

本稿では、永澤(2007)の漢語80語(表2)に関して、3言語のボイスの対照を行った。表2の近代日本語の自動詞専用(I)が「無交替型の自動詞」、自他両用(II)が「交替型」、他動詞専用(III)が「無交替型の他動詞」という本稿の区別にほぼ合致している点(ただし、表2がそのまま本稿の交替／無交替の区別に

合致するわけではない)、また、近代でも使用頻度が高かった動詞を選んでいる点で、近代漢語動詞の多くを日本語と共有している韓国語との対照に適していると考えた。なお、意味が狭まったものには網掛けを入れた。一つの漢語語幹が多義的である場合は、意味によって文法的ふるまいが異なる場合もあるが、ここでは詳細には立ち入らない^[註6]。

表2 永澤 (2007) (自他判断は「-する」接続時のもの)

近代		現代	該当例						
I 自動詞専用動詞	⇒	a 自動詞専用	安心する	移住する	感激する	感心する	居住する		
			結婚する	行動する	死亡する	進歩する	努力する		
			歩行する	労働する					
	b 自他両用	該当例なし							
	c 他動詞専用	該当例なし							
II 自他両用動詞	⇒	d 自動詞専用	運動する	影響する	関係する	乾燥する	感動する		
			減少する	残存する	集合する	出現する	消滅する		
			進化する	増加する	動揺する	爆発する	発現する		
			発達する	発展する	破裂する	沸騰する	分裂する		
			変化する						
		e 自他両用	一転する	一変する	移転する	解散する	開始する		
			回転する	拡大する	緩和する	決定する	合同する		
			混合する	実現する	縮小する	上下する	停止する		
			展開する	破壊する	発生する	復活する	分解する		
			閉鎖する	冷却する					
		f 他動詞専用	隔離する	短縮する	変更する				
		III 他動詞専用動詞	⇒	g 自動詞専用	該当例なし				
				h 自他両用	該当例なし				
i 他動詞専用	案内する			維持する	移植する	印刷する	開催する		
	解説する			吸収する	建設する	作成する	殺害する		
	準備する			製造する	設置する	設立する	断定する		
	廃止する			排除する	配置する	発明する	販売する		
	保持する			用意する					

4.2 対照方法

日本語は「-する」接続で、韓国語は接辞が「-하다 (hada)」接続で、それぞれ「ヲ格」、「를/을 (reul/eul) 格」をとるものを他動詞とした。自他の認定は辞書の表記を利用したが、表記が揺れるものを中心に、日本語はコーパスやウェブサイトを利用して確認し、韓国語については複数の母語話者に尋ねて確認した。中国語の動詞の自他は基本的に ϕ 交替であり、辞書に自他表記がないため、動詞が直接目的語をとるかどうかについて辞書を複数確認し、母語話者複数名に確認した。ただし、相原・楊 (1990) に従い、現象文の目的語は他動詞の目的語と認定しない。自動詞文なのか、他動詞の目的語が主題化された文なのか、紛らわしい場合については、望月 (2003) を参考にした。日本語の80語を基準に対照したため、中韓ではあまり使用されないもの、品詞が異なるもの、意味がずれるもの等もあるが、排除せずそのまま残した。統語的にも類似性が高く、漢語語彙の多くを共有している日韓と、統語的にかなり異質で語形成上も異なる中国語との対照は強引ではあるが、学習者の頭の中で起きていることを垣間見ることができたのではないかと考える。また、日韓の漢語の源流である古代中国語にボイス体系に近い現代中国語という第三の視点を加えることによって、日韓対照の先行研究ではボイス接辞の対応が複雑過ぎて見えにくかったことが明らかになるというメリットもあった。

4.3 対照結果 (表3)

表3の表記について説明する。

- ①日本語は「-する」、韓国語は「-hada」での自他判定である。
- ②韓国語では、同じ語幹が「-doeda」でも「-hada」でも自動詞となる場合があるため、その場合は「#自」とした。「#自他」は、「-doeda」と「-hada」の両方で自動詞用法、かつ、「-hada」で他動詞用法があるものである。
- ③()は頻度が低いということを意味する。自他両用とされる語幹も、どちらかに傾いているのが普通で、自他が拮抗しているものは少ない。日本語についてはコーパスで検索して、明らかに頻度の低い方に()をつけた(目安は1対5以上)。韓国語の()は辞書により自他表記が分かれることを意味する。

表3 日・中・韓漢語動詞のボイスの対照 (区分けは表2に基づく)

(I) (a) 日本語 自動詞専用→自動詞専用				(III) (i) 日本語 他動詞専用→他動詞専用			
	日本語	韓国語	中国語		日本語	韓国語	中国語
死亡	自	自	自	案内	他	他	×
居住	自	自	自	開催	他	他	×
行動	自	自	自	用意	他	名(他)	名詞
歩行	自	自	自	準備	他	他	他
安心	自	#自	離合詞	維持	他	他	他
努力	自	自	離合詞	移植	他	他	他
結婚	自	自	離合詞	印刷	他	他	他
進歩	自	#自	自・形	解説	他	他	他
感心	自	(自)	×	吸取	他	他	他
労働	名(自)	名(自)	名詞	建設	他	他	他
移住	自	自	自他	作成	他	他	×
感激	自	自	他<感謝>	殺害	他	他	他
				製造	他	他	他
				設置	他	他	他
				設立	他	他	他
				断定	他	他	他
				廃止	他	他	他
(II) (f) 自他両用→他動詞専用				排除	他	他	自他
	日本語	韓国語	中国語	配置	他	他	名(他)
隔離	他	他	他	発明	他	他	名(他)
短縮	他	他	自他<縮短>	販売	他	他	他
変更	他	他	自他	保持	他	他	他

④「名詞/名」は動詞用法の頻度が低く名詞用法が目立つもの、「形」は形容詞用法である。中国語の「離合詞」とは、「我結過三次婚(私は三回結婚したことがある)」のように間に成分を挟むことがあるもので、「動詞+目的語」構造のものが多い^[注7]。〈 〉は、意味や形態のずれがあるものについてのメモである。

(II) (d) 日本語 自他両用→自動詞専用				(II) (e) 日本語 自他両用→自他両用			
	日本語	韓国語	中国語		日本語	韓国語	中国語
進化	自	#自	名詞	合同	自(他)	名(#自)	名<契約>
運動	自	自	自他	上下	自(他)	名(#自他)	名詞
関係	自	名(#自)	名詞	発生	自(他)	#自	自
破裂	自	#自	自	回転	自(他)	#自(他)	自他
沸騰	自	(#自)	自	一転	自(他)	名(#自)	×
変化	自	#自	自	復活	自(他)	#自(他)	自他
出現	自	#自	自	一変	自他	#自(他)	×
爆発	自	#自	自	解散	自他	#自(他)	自他
感動	自	#自	自他	停止	自他	#自他	自他
集合	自	#自	自他	展開	自他	(#自)他	離合詞
動揺	自	#自	自他	混合	自他	(#自)他	自他
発展	自	#自	自他	冷却	自他	(#自)他	自他
分裂	自	#自	自他	分解	自他	(#自)他	自他
発達	自	#自	他・形	実現	自他	他	自他
残存	自	名(自)	頻度低	縮小	自他	他	自他
消滅	自	#自(他)	自他	緩和	自他	他	自他
減少	自(他)	#自(他)	自他	拡大	自他	他	自他
増加	自(他)	#自(他)	自他	決定	自他	他	自他
発現	自(他)	(#自他)	<気づく>	破壊	自他	他	自他
乾燥	自(他)	#自他	形	開始	自他	他	自他
影響	自	名詞	他	閉鎖	自他	他	頻度低
				移転	自他	他	×

一見して明らかなことは、無交替型 (Ia) (IIIi) では、何を自動詞とし何を他動詞とするかに関して3言語に共通性が見られるのに対し、交替型 (II d) (II e) (II f) では、言語間の対応が複雑であることである。韓国語では、交替型における「#自」の多さから、KNに(2)のようなタイプの誤用が目立つのは、生産的な自動化接辞「-doeda」が存在しているためであることが改めて確認で

きた。なお、表3はあくまでも「-hada」接続時のボイスの記述であるため「#」の表示がない「-hada」で他動詞の語幹にも「-doeda」の接続が可能である。(IIIi)では、変化主体を主格にし、語幹に「-される」を接続させても、文脈上日本語で受身文という解釈が可能である場合が多いため誤用になりにくい。が、「-doeda」と違い、「-される」は通常人為的な外部からのほたらきかけを意味するため注意が必要である。特に、交替型の(IIe)では「-される」が不自然になることが多い(例: 移転のお知らせで「?本社が移転されました」⇒「本社 {が/を} 移転しました」)。

中国語では、交替型全般で ϕ 交替(自他両用)であるため、日・韓で共に自動詞専用化の傾向のある(IIId)においても中国語では ϕ 交替で自他両用が多い。このことから、(3)のような日本語で自動詞に傾いているものを他動詞として使用するというタイプの誤用が、他動詞を自動詞として使用する誤用よりも目立つことや、なぜこれがKNには見られずCNにだけ顕著であるのかの説明される。

また、近代韓国語の漢語ボイスの調査をしていないため、推測の域を出ないが、永澤(2007)で観察された日本語の近代から現代へのボイスシフトと同様の漢語の「固有語化」が韓国語内でも起きている可能性を示唆する結果となった。興味深いのは、日本語では「-する」で自動詞専用化の流れだけが見られたのに対し、韓国語では、「-hada」で自動詞専用化と他動詞専用化の両方への分化の流れが観察されたことである。韓国語の交替型は、大枠としては、「-hada」「-doeda」で自動詞&「-hada」「-sikida」で他動詞の可能性がある^[註8]があるが、(IIId)では「-hada」「-doeda」で自動詞&「-sikida」で他動詞が多いのに対して、(IIe)では「-doeda」で自動詞&「-hada」「-sikida」で他動詞のものが増える。これは、(IIId)では「-hada」で自動詞専用化、(IIe)では「-hada」で他動詞専用化しているものが多いことを意味する^[註9]。このことは、日本語における自動化接辞の欠如と他動化接辞「-させる」の存在が、近代で「-する」で自他両用だった漢語グループに自動詞専用化の流れだけが見られる理由であるという永澤(2007)の主張の強力な傍証となり得るだろう。韓国語には「-doeda」という自動化接辞があるため、「-hada」で他動詞専用化しても、同じ語幹を自動化接辞を用いて自動詞として使用することが可能であることから、「-hada」

での他動詞専用化も妨げられないのである^[註10]。その結果、韓国語では、自動詞専用化と他動詞専用化の両方への分化の流れが可能であったと推測される。

5 まとめと展望

漢語語幹を交替型・無交替型の二つにグループ分けすることに、通言語的な根拠と教育上の意義があることを明らかにした。日中韓の対照研究からは、①無交替型の自他対応とは対照的に、交替型における言語間の自他対応がかなり複雑であること、②日中のズレは、ボイス接辞の有無とそれが引き起こす日本語側の自他の分化に原因があるのに対し、日韓のズレは自動化接辞が日本語にないことが最大の原因であることを論じた。交替型では、言語内でもゆれや通時的変化があることを考慮すると、最新の使用実態調査に基づく辞書類の表記の充実が積極的に検討されるべきだろう。本稿では、「-させる」の他動化接辞としての接続の可否を辞書に追加情報として掲載することを提案する^[註11]。

80語の調査ではあるが、この結果はKN・CNの日本語学習のみならず、日中韓の3言語をそれぞれの母語話者が学習する際に起こり得るボイスの誤用の理解に貢献すると考える。例えば、JNが韓国語を学習する場合は、(IIId)(日韓共に「-する」・「-hada」で自動詞に傾いている)では誤用が少なく、(IIe)(日本語では「-する」で自他両用、韓国語では「-hada」で他動詞に傾いている)では、「-hada」で他動詞に傾いている語幹(例: 実現)を自動詞として使用するという誤用が生じることが予想できる(例: 誤「*計画i(nom) 実現hada」⇒正「計画i(nom) 実現doeda」)。今後の課題としたい。

〈大阪大学〉

謝辞

本稿は、2017年「日本語／日本語教育研究会」第9回大会での口頭発表に修正を加えたものです。会場で貴重なご意見をくださった皆様と、原稿にコメントをくださった先生方、インフォーマントの方々にお礼を申し上げます。

(中) 盧愛晶・劉鵬飛・辛蒙・姚子昂と今井忍研究室の中国人留学生の皆様
(韓) 金니은・金恩愛・朴正薫・辛注衡・李다예・李昌石・李香伶・趙賢珍

注

- [注1] …… 漢語動詞の「-する」接続時の自他判断は永澤（2007）による。和語の記述は『精選版日本国語大辞典』（2006）、『全訳古語辞典』第4版（2011）による。
- [注2] …… 山田・山田（2009）、庵（2010）、森（2014）でも明らかにされている。
- [注3] …… 庵（2010）の調査結果でもこの傾向が中国語母語話者に顕著である。
- [注4] …… 定延（1991）は「余剰」と呼んではいないが「余剰」とは考えていない。
- [注5] …… 定延（1991）は、被使役者の「能力」や「自発性」よりも使役主の事態成立への「間接性」がSASEの使用を説明する適切な表現であるとしている。
- [注6] …… 表2だけでなく、表3についても言えることである。
- [注7] …… 張（2014）の2字漢語動詞の語形成が「動詞+目的語」の構造のときには基本的に自動詞になるという指摘は、本稿調査の結果（表3）とも合致している。
- [注8] …… 辞書の表記とは異なり、実際の韓国語では、交替型全般において「-doeda」で自動詞、「-sikida」で他動詞の自他ペアを形成する傾向が見られる。
- [注9] …… 高（2017）でも「日本語では自他両用動詞として使われる漢語動詞が韓国語では他動詞になることが少なくない」ことが指摘されている。
- [注10] …… 韓国語「停止hada」が①自動詞専用化②他動詞専用化した場合に分け、シミュレーションしてみる。①②共に、語幹「停止」を自・他両方で使える。
- ①自「機械ga (nom.) 停止hada」他「工具i (nom.) 機械reul (acc.) 停止sikida」
- ②自「機械ga (nom.) 停止doeda」他「工具i (nom.) 機械reul (acc.) 停止hada」
- [注11] …… 韓国語の辞書の一部には、漢語語幹への他動化接辞「-sikida」の接続可否が掲載されている。

参考文献

- 相原茂・楊凱栄（1990）「自動詞・他動詞—中国語と日本語」『国文学解釈と鑑賞 特集・諸言語からみた日本語の特徴』pp.123-128. 至文堂
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- 庵功雄（2010）「中国語母語話者による漢語サ変動詞のボイス習得研究のための予備的考察」『日本語／日本語教育学研究』1, pp.103-118.
- 庵功雄（2013）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄・高恩淑・李承赫・森篤嗣（2012）「韓国語母語話者による日本語漢語サ変動詞の習得における母語転移に関する一考察」『JSLs 2012 Conference Handbook』
- 庵功雄・宮部真由美（2013）「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告—「中納言」を用いて」『一橋大学国際教育センター紀要』4, pp.97-108. 一橋大学国際教育センター
- 生越直樹（1982）「日本語漢語動詞における能動と受動—朝鮮語 hata 動詞との対照」『日本語教育』48, pp.53-65.

- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 高恩淑（2017）「日本語学習者に対する漢語サ変動詞の導入について—韓国語母語話者への誤用対策を中心に」『人文・自然研究』11, pp.115-129.
- 定延利之（1991）「SASEと間接性」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』pp.123-147. くろしお出版
- 柴公也（1986）「漢語動名詞の態をいかに教えるか—韓国大学生に対して」『日本語教育』59, pp.144-156.
- 辛碩基（1993）「日本語と韓国語の漢語動詞—受動の形態を中心として」『日本語と日本文学』18, pp.12-21.
- 田窪行則（1987）「誤用分析5」『日本語学 8月号』pp.133-138.
- 張志剛（2014）『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
- 永澤濟（2007）「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』3(4), pp.17-31.
- 早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, pp.79-109.
- 早津恵美子（1989）「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に」『言語研究』95, pp.231-256.
- 許明子（2004）『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 森篤嗣（2012）「使役における体系と現実の言語使用—日本語教育文法の視点から」『日本語文法』12(1), pp.3-19.
- 森篤嗣（2014）「漢語サ変動詞におけるスル-サセルの置換について」『帝塚山大学現代生活学部紀要』10, pp.139-147. 帝塚山大学現代生活学部
- 望月圭子（2003）「日本語と中国語における使役起動交替」国松昭・湯本昭南ほか（編）『松田徳一郎教授追悼論文集』pp.236-260. 研究社
- 山田一美・山田雄人（2009）「漢語サセル動詞に関する一考察」『大阪女学院短期大学紀要』39, pp.19-29. 大阪女学院短期大学
- 尹亭仁（2015）「日韓両言語における漢語動詞の「負の転移」をめぐる—2字漢語動詞を中心に」『神奈川大学言語研究』37, pp.1-26. 神奈川大学外国語研究センター
- Haspelmath, M. (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In B. Comrie & M. Polinsky (Eds.) *Causatives and Transitivity* (pp.87-120). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

辞書・コーパス類

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『NINJAL-LWP for BCCWJ』
- 『全訳古語辞典 第4版』（2011）旺文社
- 『精選版日本国語大辞典』（2006）小学館
- 『明鏡国語辞典 第二版』（2012）大修館書店
- 『デジタル大辞泉』（2012）小学館
- 『中日辞典 第二版』（2003）小学館

- 『中日大辞典増訂 第二版』(1987) 大修館書店
『現代汉语大词典』(2007) 上海辞书出版社
『朝鮮語辞典』(1993) 小学館
『東亜新国語辞典 第四版』(2002) 斗山東亜
『延世韓国語辞書』(1998) 斗山東亜
『Prime 韓日辞典 第1版』(1994) 斗山東亜
『Prime 日韓辞典 第3版』(2004) 斗山東亜
-